

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520232

研究課題名（和文）19世紀の大衆詩における先住民インディアン  
—詩作の典拠資料から文化的影響まで—研究課題名（英文）Indians in Nineteenth-Century American Popular Poetry:  
Literary Sources and Cultural Influences

研究代表者

澤入 要仁（SAWAIRI YOJI）

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：20261539

研究成果の概要（和文）：

大衆詩人たちは1820年代という早い段階からインディアンに思いを寄せる詩を書いていた。とくに Henry Wadsworth Longfellow のインディアン叙事詩 *The Song of Hiawatha* は、インディアンを現代のアメリカに通ずる存在として歌っていた。さらに同作品は、風景画家 Thomas Moran をして、17点に及ぶウォッシュを描かせていた。それは Moran が、同作品をアメリカの風景の叙事詩として捉えていることを示していた。

研究成果の概要（英文）：

It was as early as in the 1820s that American popular poets started to sing of American Indians. Particularly, Henry Wadsworth Longfellow, in *The Song of Hiawatha*, depicted them as ancestors of modern Americans. *Hiawatha* also became the subject of Thomas Moran's seventeen wash drawings, a group of works which indicates that Moran understood *Hiawatha* as an epic of American landscape, rather than as an epic of Indians.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ大衆詩、インディアン、ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー、  
『ヒアワサの歌』、アーネスト・トンプソン・シートン、トーマス・モラン、  
ヘンリー・ロウ・スクールクラフト

## 1. 研究開始当初の背景

(1)アメリカ史の中で19世紀は、おそらくもっとも詩が書かれ、出版され、読まれた時

代だった。たとえば Henry Wadsworth Longfellow らのいわゆる炉辺詩人たちが、知識人から崇敬され、大衆から敬愛された。Lydia Huntley Sigourney ら女性詩人たちが無

数の詩作を発表し、広範な読者を獲得した。

同時に、19世紀前半は、アメリカの先住民観が大きく変化した時代だった。かつてフィリップ王戦争の時代には恐ろしい敵であった先住民が、強制移住法(1830)によって西へ追われるようになると、**Black Hawk** や **Sitting Bull** らの抵抗をのぞき、その存在が急激に希薄になっていったのである。

けれども興味ぶかいことに、詩人たちはかえってこれまで以上に先住民を歌うようになっていた。たしかに、その多くは白人の視点から描いた、空想的で不正確な記述だった。しかし詩人たちは、消えゆく民族のなかに、ロマンだけでなく、アメリカの象徴のひとつを見いだそうとしたのである。それは、思想家でもなく、小説家でもなく、詩人によって引き起こされた新しい潮流だった。

(2)19世紀アメリカの大衆詩は、これまで通俗的、感傷的、教訓的詩人とされ、研究者たちから軽視されてきた。現代でも、**Angela Sorby** などによる「教室詩人」研究や、**Paula Bernat Bennett** らの女性詩人研究という一部の例外を除いて、本格的な研究は少ない。

一方、先住民インディアンの研究は、数多くの研究が蓄積されてきた。現在でも **A. LaVonne Brown Ruoff** らによる文学研究、**Janet Catherine Berlo** らの美術研究などがまとめられている。同じく、白人によるアメリカ文学や白人中心のアメリカ文化に表れた先住民像についても、**Robert F. Berkhofer, Jr.** のすぐれた *The White Man's Indian* などがある。

けれども大衆詩に描かれた先住民となると、その研究はきわめて限られる。まず、大衆詩人の使った典拠について不明な点が多い。また、**Cooper** や **Melville** らの小説に描かれた先住民とは違って、大衆詩に描かれた先住民の姿はほとんど論じられない。ましてや先住民を歌った詩がアメリカの美術や音楽に与えた影響については、さらに言及されない。チェコの作曲家 **Dvorak** が **Longfellow** の *The Song of Hiawatha* を使って『新世界より』(1893)を作ったことは有名だが、素朴な歌曲が中心だった大衆音楽や、木版画や石版画などの大衆美術への影響は等閑視されてきたのである。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、**Henry Wadsworth Longfellow** や **John Greenleaf Whittier** ら、19世紀アメリカの大衆詩人が先住民インディアンを歌った作品を探り出し、それを以下の二つの方向から考察した。

(1)まず第一に、大衆詩人たちが、当時のどのような資料や神話を使いながら、どのよう

な新しいインディアン像を創出していたのかを明らかにする。たとえば、「凶暴な悪魔」や、「高貴な蛮人」、「滅びゆく種族」、あるいは「最初のアメリカ人」などの通念のうち、何をどのように使っていたのかを検討する。さらに、その際、詩人たちが、なぜ先住民を歌うようになったのか、そして、どのような資料を典拠にして作詩していたのか探る。

(2)第二に、それらの作品が今度はイラストレーションや歌曲などの大衆文化にどのような影響を及ぼしたのかを考察する。すなわち、先住民を描いた大衆詩にもとづく挿絵や歌曲をとりあげ、イラストレーターや音楽家たちが、詩人の描いた先住民をさらにどのように再受容したのか、どのように解釈してどのように脚色したのか、を明らかにする。そうすることによって、当時の多くの読者たちが理解した先住民像の特徴と意義を解明し、同時にそこから生まれるアメリカ史観を検討する。

(3)なお、本研究ではとくに、上述した **Whittier** と **Longfellow**、**Sigourney** および **Frances Sargent Osgood** らの作品を考察の中心にすえる。大衆詩人のなかで、おそらくもっとも先住民を歌ったのが、彼らだったからである。ただし、その中でも **Longfellow** の *The Song of Hiawatha* は大きな扱いをされることになる。この作品は大衆詩の中でも著しいベストセラーになり、画家や音楽家たちにもっとも強い創作意欲を与えたからである。

本研究最大の特色は、19世紀の大衆詩と先住民インディアンとの交わりを探るという点である。そもそも大衆詩がさかんに研究されてきたとはいえ、研究されるとすれば、その教訓性や宗教性というテーマについてだった。したがって、大衆詩に描かれた先住民に焦点を絞ることは、本研究が、見過ごされやすい領域の見過ごされやすい一面に注目した研究であるといえる。

さらに、当時の先住民議論を受容した詩人が描いた先住民をふたたび画家や音楽家が描きなおす、という、いわば二重の受容の経過をたどることに、本研究の独創性がある。当時の知識や神話をもとにして文学者が作りだした像を研究するだけでなく、それが再び展開され、新しく受け入れられた像を探ろうとしているのである。

したがって本研究では、いまや忘れられてしまった詩や美術・音楽を再発見し、それらの創作過程を明らかにすることが期待される。さらに、それらの詩や美術・音楽が、どのようにアメリカの過去をとりこみ、どのようなアメリカらしさを創出しようとしたのか、その工夫に光を当てることができる。加えて、大衆詩と大衆音楽・美術の相互作用を

明らかにすることによって、その相互作用がアメリカ文化全体の中で果たした役割や意義を見いだすことにもなる。

### 3. 研究の方法

本研究は、三年間にわたり、以下のような方法で遂行された。

(1)初年度には、インディアンを描いた大衆詩がアメリカ大衆文化に与えた影響を探った。これは、本研究全体の本来のプロセスとしては、二年目、三年目に行うべき研究であるともいえるが、すでに、具体的な目途がついていたため、初年度にさっそく取り組んだ。

すなわち、19世紀アメリカを代表する大衆詩人 Henry Wadsworth Longfellow がインディアンの英雄を歌った叙事詩 *The Song of Hiawatha* のイラストレーション研究である。とくに、19世紀後半のアメリカを代表する風景画家 Thomas Moran によるイラストレーションを考察した。これは、*The Song of Hiawatha* に基づくエッチング版画集の下絵として描かれたウォッシュ（単色淡彩画）、計 17 点である。

このイラストレーションを詳しく検討した研究は知られていない。けれども、その所在は知られていたため、アメリカのオクラホマ州にある Gilcrease Museum のアーカイヴに保存されている作品の写真撮影を依頼し、その写真を分析することから研究を始めた。

まず、計 17 点のイラストレーションが、原作の長編物語詩 *The Song of Hiawatha* のどの部分を描いた作品であるのか、テキストと照らし合わせながら解明した。さらに、それぞれのイラストレーションが、Moran の他の油絵やスケッチとどのように関連しているのか、検討した。そして、これらのイラストレーションから、大衆詩に描かれたインディアンが、どのようにアメリカ大衆文化に受容されたのかを考察した。

(2)第二年度は、基礎的調査に立ち返って、先住民インディアンを歌った 19 世紀大衆詩をこつこつと拾い集めることから始めた。

そのために、まず各種のコレクションや書誌を参照した。というのは、大衆詩人たちの詩集は、廉価版から豪華版に至るまで、あるいは袖珍版から大型版に至るまで、文字通り無数のエディションが存在していて、それらの存在を白紙の状態から探ることは非効率と考えられるからだ。もちろん、大衆詩研究文献を使って、インディアンと大衆詩の関係をめぐる記述を探し出してみたが、Whitman のインディアン観が伺われる「オセオーラ」などとは違って、大衆詩となると、その論考がきわめて限られた。

さらに、この第二年度では、Henry Wadsworth Longfellow の物語詩 *The Song of Hiawatha* (1855)などによって「よきインディアン」と化したインディアン像がアメリカの大衆文化に与えた影響を探った。とくに着目したのは、アメリカで活躍したカナダ出身の作家・画家 Ernest Thompson Seton である。Seton の活躍は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてであって、純粋な 19 世紀の大衆文化とはいえないが、大衆詩の影響から発し、さらに新たなインディアン像を造り出したと考えられるため考察した。そのために、画家、動物物語作家、少年団指導者など、多方面の活躍をした Seton 多様なテキストを集めるとともに、それらの先行研究を探った。

(3)最終年度には、前年度からの継続として、Seton の作品とその意義を考察することから始めた。当初は Seton の野外生活運動に、大衆詩の影響が大きく現れていると推測したが、むしろ、連作記事「寓話と森の神話」(1903-1904)のような、なかば空想的なテキストの中にこそ、大衆詩の強い影響が見られると考えるようになり、それらの分析を行った。

最終年度にはさらに、19 世紀の大衆詩人たちが利用した、インディアン研究文献や資料を探った。そのために、Brian W. Dippie などのインディアン研究史関連図書を使って、当時の重要な文献を渉猟し、大衆詩人たちがヒントにしたと思われる資料を探し求めた。同様に、17 世紀以来のポカホンタス伝説やインディアン捕囚物語のように、古くから語られてきた伝統についても確認した。また、Cooper らの小説に描かれたインディアン像もヒントになったと考えられるため、それらとの対比も心がけた。

### 4. 研究成果

三年間にわたった本研究では、以下のような四種類の成果が得られた。

(1)上で述べたように、初年度には、先住民インディアンを描いた大衆詩が大衆美術に与えた影響として、Longfellow の物語詩 *The Song of Hiawatha* が、画家 Thomas Moran に及ぼした影響を探った。Moran は、イエローストーンなど、西部の地質的景観を題材にしたことで知られる、19 世紀後半のアメリカを代表する風景画家であるが、その Moran が何度も *The Song of Hiawatha* について描いているからである。しかも 1875 年から 1878 年にかけては、同詩にもとづく、少なくとも 17 枚の wash drawings を残していた。これらは、エッチングの下絵を意図した作品だったため、これまで論じられることがほとんどなかった作品だ

①第一に明らかになったことは、この小さな作品そのものの魅力だ。たしかにモノクロームの絵画というのは、ウォッシュにしても、グリザイユにしても、立体感を出しやすい。しかしそれでもこれらのMoran作品の立体感、奥行感がきわだっているといわざるをえない。現在の8号(P8)程度の平面に、近景から遠景まで突きぬけるような遠近感が再現されている。その立体感があるからこそ、広大な空間が小さな紙面に圧縮されても前後左右の広がりを感じさせるのだろう。

②また、これらの単彩画はMoranが長いあいだ*The Song of Hiawatha*と関わってきたことを示している。1860年にスペリオル湖南岸を旅したときから、油絵の『ヒアワサと大蛇』(1868)や『インディアンの悪鬼(スピリット)』(1869)をへて、1872年から翌年にかけての美術誌『オルダイン』へのイラストの寄稿、さらに本章で論じた単彩画シリーズ(1875-78)、そして本章では紹介できなかった『イラスト版ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー詩集』の挿絵(1879)にいたるまで、少なくとも二十九年間、関わってきたことになる。しかも、その間、Moranはイエローストーンやグランド・キャニオンという、自他ともにMoranの代表と認められる大きな主題を発見していたのである。それにもかかわらず、Moranは*The Song of Hiawatha*に何度も帰ってきた。Moranにとって*The Song of Hiawatha*が大きな主題だったことは疑いの余地がない。

③Moranは*The Song of Hiawatha*の何にもっとも惹かれたのだろうか。それは少なくともインディアンの生活や文化ではなかった。フレデリック・レミントンのイラストレーションと対比させれば明らかだ。カウボーイなどアメリカ西部の生活や風物を描いたことで知られる画家・彫刻家のレミントンは、1890年、*The Song of Hiawatha*に計387点のイラストを添えたが、それらはインディアンの頭飾りやパイプなど、まるで人類学の図鑑を思わせるような文物(アーティファクト)のイラストばかりであった。主要な場面を描いたグラヴィア印刷の図版にも、野生的でたくましいインディアンの姿が大きく描かれていた。レミントンは、「消えゆく種族」としてのインディアンとその生活や文化に興味を抱いたのである。

しかるにMoranはちがう。Moranはヒアワサたちが生活するギッチー・ガミー(スペリオル湖)のほとりの風景やそれを取りまく深い森という、作品の舞台に興味があった。インディアンの生活文化など、まったく眼中になかった。悪霊などの超自然的な物語にも惹かれていたが、それ以上に、それらの超自然的存在が生息する自然の景観に関心があったのである。それらの超自然的存在が自然の景観といわば一体になっているように考え

ていたのである。そして、そこにアメリカの風景の特徴のひとつを見いだしていたのである。

けれども、もっとも重要なことは、Moranがアメリカの原初的な自然の風景を*The Song of Hiawatha*と結びつけたということである。大自然が*The Song of Hiawatha*の重要な大道具であると解釈したのである。しかも、ヒアワサたちは消えてしまったが、彼らの生活した舞台はそのまま残されているとMoranは考えた。いわば遺跡のように、彼らの生活の痕跡がスペリオル湖沿岸の大自然という形で残っている。この自然は、考古学の化石と同じように、彼らのかつての生息を証明している。Moranはそう訴えているようだ。

(2)すでに述べたように、第二年度におこなった主要な研究の一つは、19世紀前半の詩人たちの詩作を確認することであった。

①まずWilliam Cullen Bryantが何度かインディアンに言及してきた。たとえば代表作のひとつ“The Prairies”(1832)のなかでもインディアンが重要な題材になっていることが知られているが、それよりも以前に書かれた詩“An Indian at the Burial-Place of His Fathers”(1824)にもインディアンが歌われていた。この詩はインディアン自身に語らせる美しい作品であって、Bryantの捉える変化という概念が“The Prairies”以上に明確に示されている。

歌い手のインディアンは父祖の墓地をおとずれる。そこはすでに「われわれ衰えた種族」が捨て去った土地であった。そこからは、白人たちが開拓した土地が見える。「羊」が放牧され、「小麦」が実っている。けれども歌い手は「森」や「シカ」をなつかしむ。「(白人たち)は私たちに衰えさせる——しかり——暖かい昼どきの／四月の雪のごとく私たちは解けてゆく。」ここでこの詩は終わらず、上述の“The Prairies”と同じく変化を主題にすえ、“The Prairies”よりもさらに進んで白人たちの未来の変化も予測する。「今後、彼らの種族も消えゆくだろう、私たちのごとく／何も痕跡を残すことがないだろう／この土地にひろがる遺跡をのぞいては／死者の上におかれる白い墓石をのぞいては。」

現代の読者の視点からみれば、これは、ブライアントによる環境問題の指摘と考えることができるのかもしれない。しかし、ブライアントの場合、環境やエコロジーを考慮していたのではなく、むしろ、インディアンも白人も、自然という大きな枠組みのなかでは、同じ一員にすぎないという考え方を前提にしていた。だから、インディアンが衰えたのと同様に、いずれ白人も衰えゆくことを予想したのである。すなわちBryantは、自然のもとでは、インディアンも白人も優劣はなく同等であると考えていたのである。

②さらに Lydia Huntley Sigourney にも、インディアンをうたった作品がある。たとえば、“Indian Names” (1827)である。この詩は、オンタリオなどの湖の名前やマサチューセツなどの州名、アリゲニーなどの山地名にインディアンの名前が残っているのであるから、インディアンの記憶はけっして消えることはない、とうたった詩である。シガニーらしい、やさしい感受性を前面に押し出した詩だ。とくに、「あなたたちが彼らを父祖の土地から追いやっている」と認識しているところは、インディアンへの同情に満ちているといえるだろう。

しかし、この詩は 1827 年に書かれたのものにもかかわらず、すでに、インディアンを過去の種族として扱っているところは興味ぶかい。「あなたはいう、彼らはすべて消えさったと」や「あなたはいう、彼らの円錐形の小屋は／……／枯れ葉のように飛びさったと」のように、Sigourney はインディアンを過去の存在としてうたった。

③このように詩人たちは、早くからインディアンに同情を寄せていた。それは、オクラホマへ強制移住させられたチェロキー族が味わった辛酸（「涙の旅路」）が世間の同情を引き起こした 1838 年よりも早いことはもちろん、その強制移住の根拠になったインディアン強制移住法が成立した 1830 年よりも早いことになる。詩人たちの鋭敏な感受性が示されているといえるだろう。しかし、そこに描かれたインディアンはすでに消えゆく運命にあるとされているインディアンであったことには注意しなければならない。白人の「明白な運命」と引き換えに死地へと追いやられるさだめにあるインディアンに憐憫の情を示していたのである。そこには、生を謳歌しているインディアンの姿はなかった。アメリカ人の祖先としてのインディアンの姿もなかった。こう考えれば、いまを生きているインディアンたちを描き、その歴史を白人の歴史と連結させた Longfellow の *The Song of Hiawatha* の大胆さが明らかになった。

(3)本研究では、動物物語の作者として知られる Ernest Thompson Seton が、大衆詩に描かれたインディアンから受けた影響を探った。

Seton がインディアンに興味を抱き、その生活に倣った少年組織を設立(1902)、さらには半自伝的『ふたりの小さな野蛮人』(1903)を書いたことはよく知られている。しかし、今やほとんど忘れられている連作記事「寓話と森の神話」(1903-1904)を分析すると、そのような興味の背景には、詩人 Longfellow のベストセラー詩 *The Song of Hiawatha* (1855)の感化があることが明らかになった。

シートンはリアリスティックな作家・画家ではあったが、その根底には、Longfellow が

うたった空想的なインディアン像があり、その想像上の世界を、現実の細かな観察によって巧みに補っていたのである。じっさい、彼の動物物語を再検討してみると、そこにも精緻な観察に基づく記述と、動物の心理を想像した記述とが融合していた。観察が精緻なため、想像にも説得力がともなうのである。動物学者を自認していた Seton はしばしば観察に基づく科学的な記述の重要性を唱えていた。しかし、じつは、Longfellow の描いたインディアン像のもつ空想の魅力を利用していたのである。観察や科学だけでは文学が成立せず、空想で補うことによって真の文学が生まれることを知っていたのである。

(4)本研究ではまた、19 世紀の大衆詩人たちが利用した典拠資料を調査した。とくに、インディアン研究者 Henry Rowe Schoolcraft の著作のうち、その集大成というべき大著 *Historical and Statistical Information Respecting the History, Condition and Prospects of the Indian Tribes of the United States* (1851-57)を調査した。

Longfellow が利用資料として言及しているこの稀覯書を検討してみると、これは政治的動機に基づく民族誌学的な研究であって、インディアンに伝わる説話など、ほんの付録的な一部を構成するに過ぎなかった。文化研究というより、むしろ、インディアンを政治的に利用するための生態調査であった。

しかし、その第二巻には、Schoolcraft の以前の著作 *Algic Researches* (1839)では言及されなかった Hiawatha という英雄の伝説が紹介されていた。それは、この大著全体から見れば、ほんの枝葉末節というべき伝説だった。Longfellow は大著の中から、この伝説を見だし、それを中心にすえた物語詩を作成したことになる。しかも、*The Song of Hiawatha* に収められた様々なエピソードも、Schoolcraft から借りていた。複数の部族の伝説を混淆させながらも、強弱格のリズムで統一することによって、アメリカ人の「祖先」の物語として再生させたのである。

Schoolcraft は、Longfellow の *The Song of Hiawatha* がベストセラーになると、Longfellow が利用した伝説を再び編集して *The Myth of Hiawatha* と題した著作を出版した。それは一見すると、Longfellow の名声にあやかった売名行為のようにも思われる。しかし、Schoolcraft は、自分の大著の中から、Hiawatha 伝説を見いだしてくれた Longfellow に感謝したかったのである。それは自分の貢献を誇示するためというより、大著の小さな一部でしかなかった伝説をアメリカの叙事詩に昇華させた Longfellow に対する感謝の表現だったのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 澤入要仁「ナチュラリストの空想—アーネスト・トンプソン・シートンとマニトーバー」『国際文化研究科論集』査読有、第19号、2011年、11～24頁
2. 澤入要仁「詩人になること、詩人であること—19世紀前半のアメリカ詩とその環境」『比較文学研究』査読有、第95巻、2010年、57～78頁
3. 澤入要仁「ギッチー・ガミーの岸辺—トーマス・モーランと『ハイアワサの歌』の風景—」『国際文化研究科論集』査読有、第17号、2009年、31～56頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

澤入 要仁 (SAWAIRI YOJI)  
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：20261539

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：